

平成 29 年度 入学者選抜試験問題

100 点
50 分

国 語

実施日時：平成 29 年 1 月 17 日（火） 9:00～9:50

*下記の〈注意事項〉をよく読み、監督者の指示を待ちなさい。

〈注意事項〉

— 開始前 —

1. 監督者の〈開始〉の指示があるまで、この問題冊子の中を開けない。
2. 解答用紙には、解答欄のほかに下記の2つの記入欄がある。その説明と解答用紙の「注意事項」を読み、2項目の全てに記入またはマークする。
 - ・受験番号欄 上段に受験番号を記入し、下欄にマークする。
 - ・氏名欄 氏名・フリガナを記入する。
3. 解答用紙に汚れがある場合には、挙手で監督者に知らせる。
4. この表紙の受験番号欄に受験番号を記入する。

— 開始後 —

1. 問題は4ページから20ページまでの各ページに印刷されており、第1問～第2問の2題で構成されている。
開始後確認してページの落丁、乱丁、印刷不鮮明等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
2. 解答は全て解答用紙の所定の欄へのマークによって行う。たとえば、

3

と表示のある問いに対して2と解答する場合は、次の〈例〉のように解答番号3の解答欄②をマークする。

〈例〉

1	解 答 欄									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	0
3	①	●	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩

3. マークする際はHBの鉛筆でマーク欄を適切にマークすること。
4. 質問等がある場合は、挙手で監督者に知らせる。
5. 試験開始後30分間および試験終了5分前は退出できない。

受験番号

--	--	--	--	--	--

(問題は次のページから始まる)

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

夏目金之助・漱石の脳の標本は、人体展では、脳を中心に神経系を扱う一角に、「傑出人の脳」として公開された。その周りには、氏の⁽⁷⁾フホウをつたえる新聞の記事や生前の著作の一部があわせて展示された。主催者の一つであった国立科学博物館は、当時、館報のなかでそれをこう紹介している。

『吾輩は猫である』で有名な明治の文豪・夏目漱石は、亡くなるときに自分の身体を病理解剖するように言い残しました。そのときに摘出された漱石の脳は、東京大学医学部の標本室に保存されてきました。今日、この「傑出人の脳」が、貴重なる出来事です。／この特別展で、夏目漱石の英知がかって実際に宿っていた脳を展示できるのは、ご遺族の特別な配慮によるものです。漱石の脳は平均よりも大きく、前頭葉のしわがおおかったそうです。

ここにもあるように、「漱石の脳」は、「傑出人脳」という医学標本としての意味をりつばに備えていた。また、それは、遺族の了承を得て出展されたものだった。そのため、そのコーナーだけを切り取ってみれば、それはさしたる違和を感じさせるものではなかった。

(1)

(a)、展示された標本の配列に何らかの秩序を見出す企図にしてみれば、「漱石の脳」は、やはりその目論見を攪乱する異質なものであった。第一、それは周囲の標本のような、最新の技法により製作された標本でもなければ、観ることで「人体」という抽象を体感できる種類のものでもなかった。漱石個人の傑出性を示すべく、重量と形状とが前面に押し出された(甲)で作られていた。

また、それが「今日の献体の先駆け」と紹介されている点にも、(乙)をいわずにはいられない。漱石が自らの意思で遺体の提供を申し出たか否かは別として、当時においては、「献体」という言葉が立ちゆく状況がそもそも成立していなかったのだ。

そうしたいくつかのぎこちなさをはらみながらも、人体展に「漱石の脳」が展示されていたことには、どのような含意があるのだろうか。ここはひとまず人体展の会場をはなれ、件の標本が作製されてから人体展に出展されるまでの経緯を跡づけてみよう。

人体展の一角に展示ブースが設けられていた「傑出人脳」が、医学において研究の対象とされはじめたのは、一九世紀後半である。ワグナーが、数学者ガウスをはじめとした五人の脳を観察し、その傑出性を脳の局部の発達から説いたのだった(大脳局在論)。それ以降、大脳の特領域と精神機能との関係性が、医学者らにより追究されるようになる。ブローカの言語中枢の発見(一八六〇年)や

フリツチュとヒツツイヒによる運動中枢の発見（一八七〇年）等により、脳の各部はそれぞれ特定の機能を担っていることが、しだいに明らかにされていった。（2）

一九世紀末になると、また一方で、「天才」研究も盛んになる。人類学により培われた身体の測定技術が、骨相学を経て、「人種」や「犯罪者」のみならず「天才」の身体までも計測しはじめたのだ。文学や精神医学に「創造と狂気」という主題を授けたと言われる、イタリアの法医学者・ロンブローゾの『天才論』（一八九四年）も、この時期にもなされている。（3）

二〇世紀にはいると、傑出人脳の研究の（4）シヨウウテンは、脳の重量と回転（いわゆる「脳のシワ」）の二点に絞られてゆく。傑出人における脳内の特定の領域の大きさと複雑性が、「普通人」のそれとの比較によって、論究されていったのである。それとともに、観察および記述の技術も、ただ全体の重量を計測したり回転の多少を肉眼的に観察したりすることから、顕微鏡をもちいた組織学的なものへと移行していった。フォークト、ブロードマン、エコノモといった学者が、大脳皮質に細胞や線維の現れるさまを詳細に記載していった（細胞構築学）。（4）

漱石の脳の標本を製作した、長與又郎が傑出人脳の研究に着手したのも、この二〇世紀初頭であった。一九一〇（明治四三）年に、東大（東京帝国大学医科大学）病理学教室の助教授に就任して以降、長與は、解剖学的に脳の機能を究明することを目指しはじめたのである。

傑出人脳を収集するための「特志解剖」は、一九一三（大正二）年の桂太郎を皮切りに、東大の医学研究者や政治家・芸術家・宗教家などによった。その数は、研究報告書『傑出人脳の研究 第一輯』（一九三九年）の出版時点で、累計四〇例を越える。

さて、その傑出人脳の一つのサンプルとして、漱石の脳がアルコールのなかに移されたのは、一九一七（大正五）年二月一〇日、死亡した翌日のことであった。この経緯は、門下の久米正雄や森田草平、小宮豊隆、息子・夏目伸六らによって記録されているが、それらが共通して記すのは、漱石の脳と胃の解剖が、本人ではなく鏡子夫人の発意によるものだったということである。（b）そのあたりの事情を知るには、夫人の述を参照するのが適当だろう。

鏡子夫人口述の『漱石の思ひ出』によると、漱石の剖検を夫人が思い立ったのは、一九二一（明治四四）年一月に五女・雛子を原因不明の病でなくした後、夫婦で交わした会話がきっかけだという。「夏目が亡くなりました時に、私が進んで解剖して戴くやうに申し出ましたのは、その時のことを思ひ出したからでございます」。娘の死因が分からずじまいになったことを、夫人同様、漱石も残念

がっていたというのだ。

はたして鏡子夫人は、漱石の^(ウ)リンジウウに際して、治療に当たっていた医師のひとりに、「どうか私どもの御禮心迄に、この死體をおあづけ致しますから、大學で解剖して下さいませんか。」と申し出る。

「私は前の雛子の時の話を思ひ出し、かういふことは當人の遺志でもあると思ひますので、大體一人の肚できめて居たのでした。丁度そこに松根東洋城さんがおいでになつたので、『ねえ、松根さん。今もおききになつたやうに解剖して頂くつもりですが、どうでせう。あなた残酷だと思ひますか。私は夏目の平常から推して、當人もかうした研究の材料になることを喜ぶだらうと思ひますが。』とお尋ねしますと、『誰も残酷だなんて思はないでせう。奥さんさへ御承知なら無論結構です。僕達にも異存はありません。』といふ話でしたので、松根さんも門下の代表としてああ仰言るのだからといふわけで、そこで即座に解剖のことはきまりました」。

これが、漱石の「遺志」により解剖が決まる光景である。久米や芥川といった門人だけでなく、多くの読者に悼まれた漱石の死は、一方でこうして傑出人脳の研究の場へと接続されたのである。

漱石と夫人が、一時別居をするほど不仲であったことは、当時から有名な話であった。それもあつてか、漱石が病理解剖されるにどうぞまらず、頭蓋まで開かれたことには、少々毒のある憶測がなされた。森田は、「これ「漱石の脳の解剖」は天才の頭脳といふやうな意味でなく、奥さんの考へでは、先生の脳に異状があるか何うか調べて貰ふつもりであつたらしい」とも言う。

その「真相」は、もちろんここで云々すべくもない。ただ、ひとつ確実に言えるのは、漱石の脳の「特志解剖」は、Xと
いうことである。先に引いた国立科学博物館の館報の記述を受けてか、人体展の会期中、漱石の脳の標本は「献体運動の理解者だった夏目漱石の脳ホルマリン漬け」とも、「献体の先駆けとも言われる文豪、夏目漱石の脳標本(東大医学部蔵)」とも紹介された。だが、それは「献体」なる概念のなかつた時代に、「献体」とはまるで異なる了解のされ方で、ガラス瓶の中に移されていたのである。

とはいえ、ここですべきは、作家の脳の^(ロ)スウキな運命を思つて、ひとりよがりの感傷にひたることではあるまい。(c)、人体展での漱石の「献体」に関する広報を、誤謬としてあげつらうことでもない。そうではなく、人体標本の周りに言葉の付着するさまを、^(ハ)シユクゼンと記述していくことであろう。

人体標本の御多分に洩れず、傑出人脳の上にも、これまでにさまざまな意味が凝集してきた。たとえば、日本でその研究が始められ

ることとなった事由の第一は、「民族の優秀性」を立証することにあつた。長興は一九一〇（明治四三）年当時、講義の準備をしていた際に、参考書の中に「東洋人の脳の重量少なし」とあるのを目にする。これにいたく「憤慨」し、彼は日本人の傑出人の脳の研究を思い立ったのだつた。（5）

長興の共同研究者で、のちに跡を引き継ぐこととなった内村祐之も、「優秀偏異者たる傑出人」の脳髓の研究に、人類の将来における進化を読むとともに、「わが民族性の*せんめい 闡明」を示すという意義を見出していた。傑出人脳の研究は、ひとり医学の場にあつたのではない。^A それはまた隣接領域の動向に連なるものであつてみれば、当然ながら、時局特有の意味を応分に帯びたのだつた。

だが、いま注目しておきたいのは、標本にどのような言葉が充填じゅうてんされていたか以上に、標本の言説的な現れ方そのものである。モノは標本として言葉に拾いあげられる。しかし、かといって、その同じ言葉が標本の上にそのまま留まり続けるとは限らない。

傑出人脳の研究も、戦後、その理論の支持者が減少したことから、しだいに行われなくなる。それとともに、丁重に収集された「漱石の脳」は、そのまま丁重に標本室の収蔵品となつていった。そして、終戦からちょうど半世紀後の催し物に出展された時には、それはまた別の物語を語るようになっていた。

人体展の広告リーフレットには、「文豪・夏目漱石の脳の展示は、この標本を通して、脳が生命の中心であり、かけがえない臓器であることを表現しようとするものです」という言葉も載つた。漱石を「献体」と結び合わせる説もまた、そうした言葉の一つとして出来た。「漱石の脳」は、「文豪・夏目漱石の脳」であるとともに、「献体の先駆け」として、そしてまた「脳が生命の中心」であることも示す標本として、ひとびとの視線に供されたのである。

人体展がはねると、標本はふたたび東大の総合研究博物館へと戻された。その脳は、いまもそこに丁重に保管されている。そして、おそらく今後もその場所で、^B あらたな言葉に引き出されるまで丁重に保存され続けるのである。

（注） 闡明…それまで不明瞭であつたことを、はっきりさせること

（出典） 香西豊子『流通する「人体」』より

※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

(ア)	フホウ	①	譜
(イ)	シヨウテン	①	相
(ウ)	リンジュウ	①	臨
(エ)	スウキ	①	来
(オ)	シユクゼン	①	淑
		②	縮
		③	祝
		④	叔
		⑤	肅
		②	基
		③	隣
		④	奇
		⑤	機
		②	倫
		③	少
		④	衝
		⑤	輪
		③	証
		④	符
		⑤	普

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① しかし ② むしろ ③ これに対して ④ したがって ⑤ ましてや

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）9、（乙）10

（甲）

- ① 斬新なかたち ② アナログなかたち ③ 世俗的なかたち ④ 最新のかたち ⑤ 傑出したかたち

（乙）

- ① 不協和 ② 共感 ③ 先入観 ④ 希望 ⑤ 既視感

問四 空欄 X に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 11

- ① 漱石と夫人との不仲によって促されたわけではない
② 生前の本人の同意なしに行われたものである
③ 現代の「献体」という言葉では指示することはできない
④ 現代の「献体」の基準で考えればありえないものだ
⑤ 漱石の脳の異状を調べることを目的としていたわけではない

問五 次の一文は、本文中の(1)～(5)のどこに入れるのが最も適当か。次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 12

個々の身体が呈する特性は、この時期、医学的な技法によつて、同一スケール上の極性へと読みかえられていったのである。

- ① (1) ② (2) ③ (3) ④ (4) ⑤ (5)

問六 傍線部A「それはまた隣接領域の動向に連なるものであつてみれば、当然ながら、時局特有の意味を応分に帯びたのだつた」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 13

- ① 日本民族の優秀性を立証するために傑出人の脳を研究するという考えが、時代遅れのものになっていったこと。
② 脳の研究にはさまざまな分野の研究成果が必要になるため、学際的な関心をもたれるようになったこと。
③ 傑出人の脳の研究が、結果として日本民族の優秀性を立証することにつながったこと。
④ 人体展での漱石の「献体」に関する広報は、現在の「献体」とはまるで異なる了解のされ方をしてしていること。
⑤ 傑出人の脳の研究が、純粋な医学的関心によるだけでなく、当時のイデオロギー的関心によるものでもあったこと。

問七 傍線部B「あらたな言葉に引き出されるまで丁寧に保存され続ける」とあるが、この説明として最も適当なものを、次の①～

⑤の中から一つ選べ。解答番号は 14

- ① 漱石の脳にはさまざまな思想を喚起する可能性があるということ。
- ② 漱石の脳が装いも新たな標本として提示される日がやがてくること。
- ③ 漱石の脳がまた新しい意味を担って提示されうること。
- ④ 漱石の脳が「猷体の先駆け」であることを示す標本として保存されていること。
- ⑤ 漱石の脳が「傑出人の脳」としての役割を終えたということ。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 15

- ① 人体展で展示された漱石の脳は、最新の技術によって製作されたものではなかったので、「傑出人脳」という医学標本としての意味を備えているとはいえないものであった。
- ② 「傑出人脳」が医学において研究の対象になったのは一九世紀後半であり、その重量とシワによって脳の局所の発達程度を検討し、これを傑出性と結びつけた。
- ③ 娘の死因がわからなかったことを悔やんだ漱石の夫人は、漱石も同様に悔やんでいたことを理由に、漱石の脳に限ってその剖検を許可した。
- ④ 漱石と夫人との不仲が知られていたことから、夫人が漱石の脳に異常があるかどうかを調べてもらうつもりなのではないかという推測がなされた。
- ⑤ 標本の言説的な現れ方そのものを検討するためには、標本に与えられた言葉をいったん括弧に入れ、モノとしての標本自体を虚心に見据える必要がある。

第2問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(配点50点)

「話せばわかる」――。これは、五・一五事件、昭和7年5月15日に海軍青年将校たちによって時の内閣総理大臣、犬養毅が銃撃されたその直前に口にした言葉として伝えられているものです。こうした言葉がなんの逡巡しゆんじゆんもなしに無視されるとき、社会は壊れるのだと思います。

とつさに口をついて出たこの言葉に、言論の力と相互理解の可能性が賭けられていたことは疑いありません。けれども、それを聴き入れる魂をもはやもたない人たちにおいては、犬養が信じた言論の力は肉体の(暴)力に転位し、相互理解の可能性は相互遮断の現実へと裏返ってしまっていました。

意見の対立が調停不可能なまでに激化していたこと、そのことに問題があるのではありません。そうではなくて、そういう対立が対立として認められる場所そのものが損ねられたこと、壊れてしまったこと、それが問題なのだと思います。理路をつまびらかにする、そういう説得にもはや「耳を貸す」「聞く耳をもつ」ことを拒む人たちが、暗殺といった惨劇を惹き起こしました。ここには、別の言葉はあつても、そのあいだに公分母は存在しませんでした。

わたしがこれまでとおなじくここでもしようとしていくように、「わたしたち」という語を使うということには、つまり、みずからの個人的な主張を(他の人たちにもさまざまの異論がありうることを承知のうえで)「わたしたち」というふうに第一人称複数形で語りだすことには、わたしが「わたしたち」をせんしやう僭称する、という面がたしかにあります。(a)、おもねりやもたれつき、つまりは同意への根拠なき期待といったものがあるにちがいありません。とはいえそこで、「わたしたち」を「わたし」と言い替えたところで、事は変わりません。「わたし」とはそのように語る者のことであるという「話者」の当然の権利を、というか了解を、他者にあたりまえのように求めているからです。この了解を拒むこと、それを「(甲)」アと言って拒んだのが、あの狙撃者たちです。その襲撃の場では、「わたし」という第一人称と「きみたち」という第二人称を包括する「わたしたち」が一方的に否認されたのです。

「話してもわからない」ことはもちろんいっぱいあります。そういうときでも「わかりあえないこと」からこそ始めようという姿勢が、メッセージが、「わたしたち」という語には籠められています。(b)、それがもはや他者に通用しないとき、意味(meaning)として理解できても意味あるもの、significantなものとしては聴かれなるとき、一つの社会、一つの文化が壊れてしまいます。

そうした壊れ、崩れには、すくなくとも二つのかたちがあります。一つは、外部の権力による侵襲、あるいは内部の権力による圧制が、その社会の構成員を「難民」として離散させるかたちであり、いま一つは、ある社会のなかで（乙）が⁽⁷⁾シユウフクしがたいまでに昂じるといふかたちです。

後者について、T・S・エリオットはかつて「文化の定義のための覚書」（1848年）のなかで、こんなふう述べていました――

文化の解体は二つもしくはそれ以上の社会層が全くかけ離れてしまつて、それらが事実上個別の文化と化する場合に現われます。また上層水準の集団における文化が分裂して断片化し、それらの各々が一つの文化的活動のみを代表する場合にも現われます。

（「文化の定義のための覚書」『エリオット全集5』深瀬基寛訳、中央公論新社、246頁）

交通の不能、伝達の不能。そういうかたちでの人びとのあいだの乖離^{かいり}によつて一つの〈文化〉が崩壊する可能性は、そもそも社会と
いうものが、異なる共同体、異なる文化集団、異なる階層が「統合」されたものとしてある以上は、その社会につねに⁽⁴⁾フクザイして
います。それは、ここに述べられているように、職能の複雑化や個別化などとおして、莖^すに鬆が入るようにそれと気づかれることな
く進行することもあれば、社会の異なるセクター、異なる階層、異なる文化集団などの利害が和解不能ほどに対立し、その軋轢^{あつれき}がい
つきよに激しく噴き出すというふうにも起こることもあります。しかしそれらがめつたなことでは最終的な解体や崩壊にまで転げ落ちる
ことがないのは、出自や利害や文化的な背景を異にしながらも、それらの差異をある共通の理念で覆いえてきたからです。国民国家と
して成形される現代の社会でいえば、〈民主制〉と〈立憲制〉という理念がそれにあたるでしょう。

このような理念が共有されないところでは、社会のなかの複数の異なるセクターが他との交通を遮断して、経済的な依存関係とは別
に、おのおのが閉鎖された共同性へと収縮したままです。それを超えて、たがいに見知らぬ人びとがそれでも見知らぬまま、国民国家
という、一つの擬制的（Fictitious）ともいえる政治的共同体を形成するには、共通の理念が、ときにはその「⁽⁵⁾シユウチヨウ」となる
存在が必要となるのです。

ただ、ある理念を共有しようというその意志は、一定の権勢をもつ集団による他集団の「同化」というふうには、（c）同心円状
にそれを拡大したところに成り立つものであつてはなりません。

- a そうした経験を経て現在、それぞれの地域でそれぞれに異なる複数の《近代性》があらためて模索されつつあります。
- b いわゆる西欧発の《近代性》はある面、ヨーロッパというローカルな場所で生まれた社会の構成理念が世界へと同心円状に拡がっていったものと見る事ができます。
- c 《近代性》の諸制度はそれぞれの場所で、希望を育むとともにさまざまの軋みや傷や歪みゆがを強いてきました。
- d ですが、異なつた歴史的時間を刻んできた国々に、伝搬もしくは強行というかたちで移植されたあと、それぞれの国で伝統文化との複雑な軋轢を生みました。

《近代性》を「未完のプロジェクト」と呼んだのはH・ハーバースですが、これは理念の完全な実現の途上にあるという意味のみならず、その理念の具体化には未知の複数のかたちがありうるという意味でも解されるべきだろうと思います。

「支配的な思想とは、まさしくある一つの階級を支配階級たらしめる諸関係の観念的表現であり、その階級の支配の思想である」とK・マルクスが看破したように、この共通の意志もまた、支配的な集団の一つの「信仰」であることは否めません。じじつ、《近代性》という「信仰」は、それ自身がなにより《普遍性》を謳うたうものであるのですから、これまでいろいろな場所で目撃されてきたように、これに従わない人たちの存在を事前に否認し、政治という交渉の場所から排除してしまいます。そしてそれゆえにこそ、ある社会を構成する複数文化のその《共存》のありようがきわめて重要になるのです。《民主制》と《立憲制》を下支えする《寛容》の精神は、他者の自由に対して不寛容な人たちにさえも寛容であることを求めるものであるはずだからです。これは綱渡りのようにきわめて困難な課題をすすんで引き受けようとする精神なのです。

エリオットはこの《共存》の可能性を、なにかある「信仰」やイデオロギーの共有にではなく、あくまで社会の諸構成部分のあいだの「摩擦」のなかに見ようとした。あえて「摩擦」を維持するとは、これもまたなかなか容易いことではありませんが、エリオットはこう言っています（傍点は引用者）――

「一つの社会のなかに階層や地域などの相違が」多ければ多いほど、あらゆる人間が何等かの点において他のあらゆる人間の同

盟者となり、他の何等かの点においては敵対者となり、かくしてはじめて単に一種の闘争、嫉視、恐怖のみが他のすべてを支配する、という危険から脱却することが可能となるのであります。

(同書、290頁)

B 一つの社会の「重大な生命」はこの「摩擦」によつて育まれるというのです。社会のそれぞれの階層やセクターはかならず「余分の附加物と補うべき欠陥」とを併せもっているのであつて、それゆゑに生じる恒常的な「摩擦」によつて「刺戟が絶えず偏在している」ということが何よりも確実な平和の保障なのであります」とまで、エリオットは言います。というのも、「互いに」コウサクする分割線が多ければ多いだけ、敵対心を分散させ混乱させることによつて一国民の内部の平和というものに有利にはたらく結果を生ずる」からです。

こうした「摩擦」を縮減し、消去し、一つの「信仰」へと均してゆこうとする社会は、「牽引力」と「反撥力」との緊張をなくし、その「生命」を失つてしまいます。この点についてエリオットはこう言っています。——「一国の文化が繁栄するためには、その国民は統一されすぎてもまた分割されすぎてもいけない。(……) 過度の統一は野蛮に起因する場合が多く、それは結局、圧制に導く可能性があり、過度の分割は頹廢たひはひに起因する場合が多く、これまた圧制に導く可能性があり」と。

以上の議論は半世紀以上前のものですが、現代においても、というか現代においてよりいっそう、リアルになってきています。権力といえ、わたしたちは長らく、じぶんたちの暮らしを細部まで管理し、一つに糾合しようという、「ヨクサン」的な権力による《統合の過剰》をひどく警戒してきました。けれども、昨今における格差の異様な肥大、排外主義の止めようのないエスカレーションなどをみれば、わたしたちが憂うべきはむしろその逆、人びとを一つにまとめさせない X ≧ (齋藤純一) ではないかと思われ

(注) 僭称：勝手に自分を越えた称号を名乗ること

(出典 鷺田清一『摩擦』の意味——知性的であるということについて)『内田樹編 日本の反知性主義』より)

※本文は、出典の記述を一部省略している。

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナの部分に漢字に直す場合、最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は(ア) 、(イ) 、(ウ) 、(エ) 、(オ)

- | | | | | | | |
|-----|--------|----|----|----|----|----|
| (ア) | シユウフク | ①宗 | ②修 | ③習 | ④終 | ⑤集 |
| (イ) | フクザイ | ①復 | ②服 | ③伏 | ④覆 | ⑤副 |
| (ウ) | シヨウチヨウ | ①徴 | ②超 | ③調 | ④張 | ⑤聴 |
| (エ) | コウサク | ①策 | ②作 | ③削 | ④錯 | ⑤昨 |
| (オ) | ヨクサン | ①欲 | ②翼 | ③沃 | ④浴 | ⑤抑 |

問二 本文中の(a)～(c)に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上用いてはならない。解答番号は(a) 、(b) 、(c)

- ① あるいは ② だから ③ けれども ④ いわば ⑤ もし

問三 空欄（甲）、（乙）を補うのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は（甲）、（乙）

（甲）

- ① 事実無根
- ② 威風堂々
- ③ 問答無用
- ④ 馬耳東風
- ⑤ 言語道断

（乙）

- ① 意味あるもの
- ② 意見の対立
- ③ わたしたち
- ④ 相互遮断の現実性
- ⑤ 格差と分断

問四 空欄 X

に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 26

- ① 分断の深化
- ② 統合の過剰
- ③ 摩擦の増大
- ④ 嫉視の増大
- ⑤ 刺戟の偏在

問五 傍線部A「別の言葉はあつても、そのあいだに公分母は存在しませんでした」とあるが、その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 27

- ① 個人的な主張はあつても、双方の意見の対立について、それを調停する方法がなく、対立を調停することが不可能なまでに激化していたということ。
- ② 個人的な主張はあつても、対立が対立として認められる場所、「わかりあえないこと」からこそ始めようという姿勢がなかったということ。
- ③ 言論の力と肉体の力という別の言葉はあつても、お互いが意味として理解できる共通の言語がなかったということ。
- ④ 「わたし」と「きみたち」という別の視点はあつても、お互いが意味として理解できる共通の言語がなかったということ。
- ⑤ それぞれが理解できる言葉が別のものであったため、理路をつまびらかにすることができなかったということ。

問六 本文 中の a ～ d の文を意味の通るように並べたものとして、最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ の中から一つ選べ。

解答番号は 28

- ① b — c — a — d
- ② b — d — c — a
- ③ b — d — a — c
- ④ c — a — b — d
- ⑤ c — b — d — a

問七 傍線部 B 「一つの社会の『重大な生命』はこの『摩擦』によって育まれる」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ の中から一つ選べ。 解答番号は 29

- ① 社会において共存が保障されるには、異なる階層やセクターが多いほど、対立が分散され圧制という危険から脱却することが可能だから。
- ② 一つの社会の生命を維持するためには、過度な統一を強要する圧制に対し、異なる階層やセクターがそれぞれ言論による反抗や闘争を必要とするから。
- ③ 〈民主制〉と〈立憲制〉を下支えする《寛容》の精神は、異なる階層やセクターが多いほど、その構成員の敵対心が分散されて育まれるから。
- ④ 社会の生命である《近代性》は、一つの社会のなかに存在する異なる階層や地域などが相互に言論を戦わせることによって育まれるから。
- ⑤ 異なる階層やセクターが多いほど、それぞれが同盟者となり、社会が一つの信仰やイデオロギーを共有することが可能になるから。

問八 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 30

- ① 犬養毅は言論の力を信じていたが、意見の対立が調停不可能なまでに激化したことで、それは肉体の力に転位し、それゆえに社会が崩壊した。
- ② 五・一五事件の狙撃者たちは、みずからの個人的な主張を「わたしたち」という語を用いて説明したが、犬養毅は主張の違いを理解せず、「わたし」を用いた。
- ③ 一つの文化が最終的に崩壊したりすることがないのは、社会の中の異なるセクター同士の利害が対立しても、国家としての経済的利益を共有していたからである。
- ④ 西欧発の近代性は普遍性を謳っているが、これはヨーロッパというローカルな場所で生まれたものにすぎず、近代性の理念の具体化には複数のかたちがありうる。
- ⑤ 一国の文化が繁栄するためには、野蛮な支配者により政治が行われることのないよう、民主制と立憲制を維持していくことが大切である。

